

受験番号					
氏名					

二〇二六年度 教育学部学士入試 問題用紙

「小論文」 国語国文学科

【注意事項】

- 一、問題一、問題二の二題とも必ず解答すること。
- 二、解答はすべて「解答用紙」に記入すること。
- 三、一枚目の解答用紙に問題一を、二枚目の解答用紙に問題二を、それぞれ解答すること。

問題一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

若者がひとり、どうしても死ぬほかはないと思いつめて、街を歩いている。心は千々に乱れ、どれほど歩いたかわからない。自殺もまたするものである以上、失敗のない何らかのしかたをきめなければならぬのであった。「日種にあまる色さまざまの計画が両国の花火のやうにはつとひらいては消え、ひらいては消え、これときまらぬままに、よらよら鎌倉行の電車に乗った。」

今夜、死ぬのだ。それまでの数時間を、私は幸福に使ひたかつた。ごつとん、ごつとんのろすぎる電車にゆられながら、暗鬱でもない、荒涼でもない、孤独の極でもない、智慧の果でもない、狂乱でもない、何呆感でもない、号泣でもない、悶悶でもない、嚴肅でもない、恐怖でもない、刑罰でもない、憤怒でもない、諦感でもない、秋涼でもない、平和でもない、後悔でもない、沈思でもない、打算でもない、愛でもない、救ひでもない、言葉でもつてそんなに派手に誇示できる感情の看板は、ひとつも持ち合せてゐなかつた。

（太宰治「狂言の神」）

表現への潔癖さはだぶん、わかつてほしい……という未練によく似た甘えとうらはらに発生するのだろう。おおくの言語学者たちがよく割り切れたコミュニケーションなどという用語をもちいて涼しい顔で論じていることがらは、じつは甘えの流通問題なのだ、と言って

さてこの自殺志願の若者は、なかなかむずかしい文字の「暗鬱」からはじめて「救ひ」にいたるまで、都合二十項目の表現をならべたてたあげく、「言葉でもつてそんなに派手に誇示できる感情の看板は、ひとつも持ち合せてゐなかつた」と言う。抜け抜けと言う、という感じがしないでもない。「ためらい」の表現も見かたによつてはじゅうなんに誇示であるう。しかし、思いつめることによる饒舌の下にひそむ甘えが、自殺せずに現に生きていて、とちらかと言えは涼しい顔で語っているのかもしれない私たちに、不快の念をおこさせないどころか、奇妙な悲しい感懐をもよおさせる。甘えを、甘つたれではなく、かすかなユーモアをまじえた悲しみに造形したのは、作家のしたたかな言語感覚であった。

「めらめる言語表現の根底に働いている甘えの原理」と言つてみよ、それは「とりわけ、ことはを中断することによつて沈黙に語らせる」という「黙説」の表現と、ことはを過剰に発信する「ためらい」の表現という、反対の極端ながたのなかにあらわれる。小林秀雄の手によつてオナイリアがハムレットにあてた遺文のなかでもらした、「女の手紙には、必度、点々があるものだ」と、あなたはおつしやる。ありますとも、点々だつて字は字です」というつぎやきを思い出してもいい。黙説の「……」ではなく、ためらいのくりごとについてオナイリアが同じ感懐をもらしたとしてもおかしくはない。そう言えば、いましがた見た「詩示できる感情の看板」の持ちあわせのなかつた若者の手記も、遺言の一種であつた。

母言語はその名称のとおり、私たちを育ててくれた。無意識のうちに私は、ものと考えかたから感じかたまで、母言語からおしえられた。しつげられたと言つてもいい。それは私のことばであり、ほとんど私自身である。だからこそ、私がことばづかいに迷うとしても、次々とこころみにならべてみる。「ためらい」の表現はすべて日本語となるだろう。同様に、

「小論文」 国語国文学科

受験番号					
氏名					

ことばにまつまるときも、私の《黙説》は日本語であるほかはない。「……」は、たいてい、どこの国の活字でも点々だろうが、それは地球上共通の沈黙をあらわすわけではない。私が口をつぐむときは、その沈黙さえも日本語である。

それほどまでに、母言語は《私自身の》ことばである。にもかかわらず、それは《私だけの》ことばではない。私は日本語を、一億以上の大々と共有し、何千年来の無数の先輩たちと共有している。私が生まれたとき、私の母語は《妙な言いぐさだが、私抜きで》すでにできて、そこにあつたのだ。私は、あとから日本語のなかへ参加させてもらった。ある言語文化のなかへ、私たちはみな新参者として加盟する。言語学者や哲学者がしばしば、言語は制度であると言う。この的確な比喩がおしえてくれる。言葉の業のことからなかに、言語とは自分の内部の《他者》である、というまことに切実な事実がある……と、私は思う。

ちやうどからだのなかのどこかに名状しがたい（医師に質問されたとしてもなかなか適切な説明のむずかしい）痛みやいらだちを感じているときに、人は、心の奥底かどこかに、ひそやかな思いをいだいていることがある。それは容易なことばになるものではない。にもかかわらず、ことばにしてみなければ自分でもじゅうぶんに納得できるものではない。そういうとき、ふと、ほとんども幸運な偶然のようにある適切なことばを思いつき、ほつとすることがある。それこそ自分だけのことばだ、と感じることがある。けれどもそのことばは、私がそのときの自分の気もちに合わせてあつた、こしらえたものではない。私以前に、無数の他者たちもちやいてきた、かぞえきれない用語法の累積をになつたことばなのだ。ことばはすべて既成品である。

（佐藤信夫「レトリック認識」より）

問一

傍線部1の内容について、《黙説》と《ためらい》、それぞれの背景に注目しながら、説明しなさい。

問二

傍線部2と傍線部3について、二つをそれぞれ具体的に説明しつつ、両者の関係について説明しなさい。

「小論文」 国語国文学科

No. _____

受験番号					
氏名					

【問題二】 次の文章は、『宇治拾遺物語』の一節である。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔、清明が土御門の家に、老しらみたる老僧来りぬ。十歳はかりなる童部二人具したり。清明、「なにその人にておはするぞ」と問へば、「播磨国の者にて候。陰陽師を習はん心ざしにて候。此道に、ことにすぐれておはします由よし承て、せうく習ひ参らせんとて、参りたるなり」といへば、清明が思やう、「此法師は、かしこき者にこそあるめれ。我を心みんとて来たるものなり。それに悪く見えては悪かるべし。この法師、すこしひきまさぐらんとて、供なる童は、式神をつかひて来たるなめり。もし式神ならば召し隠せ」と心の中に念じて、

袖の内にて印を結て、ひそかに咒しゆを唱ふ。さて法師にいふやう、「とく帰給ね。後に良き日して、習はんとの給はん事どもは、教へ奉らん」といへば、法師、「あらたう」といひて、手をすりて額にあてて、立走りぬ。

今は去ぬらんと思ふに、法師とまりて、さるべき所く、車宿くるまどまりなどのぞきありきて、又前に寄り来ていふやう、「この供に候つる童の、二人ながら失て候。それ給はりて帰らん」といへば、清明、「御房は、希有きゆうの事いふ御房かな。清明は、なにの故に、人の供ならんものをば、取らんずるぞ」といへば、法師のいふやう、「さらに、あが君、おほきなることばり候。さりながら、たゞ許し給はらん」とわびければ、「よし、御房の、人の心みんとて、式神つかひて来るが、うらやましきを、事におぼえつるが、異人ひとをこそ、さやうには心得給はめ、清明をば、いかでさる事し給べき」といひて、物読ものよみむやうにして、しばしばかりありければ、外の方より童二人ながら走入て、法師の前に出来ければ、その折、法師の中やう、「実に心み申つる也。仕事はやすく候。人の仕ひたるを隠すことは、更にかなふべからず候。今よりは、ひとへに御弟子となりて候はん」といひて、ふところより名簿なぼひきいでて、取らせけり。

問一 傍線部について、何がどう「おほきなることばり」なのかを、「おほきなることばり」の意味も含めて、わかりやすく説明しなさい。

問二 この話の面白さはどこにあるのか。話の流れを要約した上で、自分がこの話の面白さについて考え、分析したことを、具体的に述べなさい。



ここから記入すること ←

Blank lined area for writing, consisting of multiple horizontal lines.

ここから左には記入しないこと



ここから記入すること
↑

Blank lined area for text entry.

ここから左には記入しないこと



東京海上火災保険株式会社

